巻頭言

風工学会のポータルサイト Portal Site to JAWE

大熊武司*

Takeshi Ohkuma

先だって、久々に本会のホームページにアクセスしました。目的は10年ほど前に藤野、田村両理事(当時)が世話役となって作成された「日本風工学会の将来構想に関する検討 報告書」のコピーを入手するため、切っ掛けは本会会誌2008 July号の「報告」に掲載された山田理事が中心となって纏められた「日本風工学会の課題と行動計画に関する検討 報告書」に関心を持ったからです。藤野 WG の報告書はホームページのトップページ(ポータルサイト)にある「学会関連文書」に収納されていましたが、普段は、会誌・論文集やメールにより本会の活動等のおおよそを知ることができるので、「ブックマーク」してはいるもののアクセスはご無沙汰でした。

さて、山田 WG 報告書は藤野 WG 報告書以降の本会の活動についての自己点検報告書ともいうべきものです。

藤野 WG は1996年6月の理事会決定に基づいてスタートしたもので、本会の現状分析、学会活動、組織と運営などに関する将来への方向性の議論、それを具現化するためのいくつかの提案からなる報告書が1998年1月に理事会に答申され受理されました。以来、本会の活動はこの答申を尊重して展開され、今日の充実を迎えることとなります。とはいえ、これからのさらなる発展には山田 WG 報告書にあるように課題はいろいろあります。ホームページによる一般社会への情報発信も充実しつつありますが、本会の活動目的の広がりとともに訪問者の特性も多様になります。会員外の方々の訪問に応えることも本会の発展に欠かせないところだと思います。

このような関心から、山田 WG 報告書、藤野 WG 報告書、本会ホームページの三者を通して、特に、社会発信という観点で感じたことを二三、記させていただきます。

第一は、「風工学とは」についてです。仕事柄、「風工学」の意味について質問されたり説明する機会が多いのですが、ポータルサイトにある「風工学とは→風工学の研究分野」、「日本風工学会について→日本風工学会の紹介」ならびに「出版物・論文等の投稿→(最近追加)風工学ハンドブック」のそれぞれに記されていますように、本会の活動を織りなす縦系と横系つまり関係する分野とテーマは多岐にわたりますし、これからも増えていくことと思います。これらの縦系と横系をどのように紡いでいくかが正しく本会の今後の展開そのものですので、上述の3メニューにある「風工学」を総括したような説明を「風工学とは」に掲載するのがよいと思います。

第二は、「研究調査活動」についてです。ポータルサイトにある「研究会活動」に現在活動中の研究会が紹介されていますが、これまでもいくつかの研究会が設けられ、それぞれの成果が本会会誌に掲載されています。そもそもこの「学術研究会制度」は1992年10月に正式に決定され、その第1号として「流体実験相似研究会(松本勝主査)」が発足しました。あわせて、「会員諸兄の研究会への参加や研究会設置の新たな提案が望まれ」ということで、本会 No.58(1994)に「運営委員会・学術研究会の運営規定(案)」が公表されました。運営規定の最新版については承知しておりませんが、研究会活動のさらなる発展のためにも、これまでに活動された研究会とその成果掲載号を「研究会活動」に紹介するのがよいと思います。

ちなみに、「風災害研究会」は1998年5月に学術・運営委員会傘下の常置研究委員会として発足し、当時運営委員長の私が主査を務めることになりました。任期中に

* 神奈川大学工学研究所 客員教授

Visiting Professor, Institute of Technological Research, Kanagawa University

一定の成果をということで、いささか大袈裟ですが、“21世紀を前に 20 世紀を総括する”という観点にたって、設計基準類の変遷を含めて、テキスト「強風災害の変遷と教訓」を作成しました。はじめは、現タイトルの後に“～21 世紀を前に”を加えようと思ったのですが、それは、本テキストを使用した第 1 回「防災フォーラム」のフォーラム名に入れることにしました。現在、本テキストの改訂版を準備中とかがっております。本テキストは“正式な出版物”を想定したものではありませんでしたので、正式な出版物としての改訂版の刊行を楽しみにしております。

最後は、会誌に掲載される「特集 自由公募型の年次研究発表会・梗概集」以外の「特集」のタイトルと掲載号をホームページで紹介しては、という件です。この「特集」はポータルサイトの「出版物・論文等の投稿」にある「会誌・論文集 目次一覧 (PDF ファイル)」でご覧頂けるように、編集広報委員会のご尽力によりほぼ毎号企画されるようになってきました。この「特集」はいわば、その時々に関心事に本会として組織的に応える技術・研究報告集です。特集としてのタイトルが付けられてないものも見受けられますが、今からでもよいから「タイトル」を設け、是非、ホームページに掲載し社会に積極的に発信するのがよいと思います。

以上、ホームページの運営に携わっておられる方々の大変なご苦勞は承知しているつもりですが、勝手な思いを述べさせて頂きました。これら諸点を含めて関係する皆様にホームページの自己点検をして頂ければと思う次第です。